

おこん狐と泥田の酒盛り

むかし、八代(現在の牛堀町上戸)と潮来の境の森の中に、小さなお稻荷さまがありました。稲荷の森は昼でも薄暗く、まして夜になれば大の男でも一人で通るには気味が悪いところでした。ある晩のこと、潮来に遊びにいった二人の男が帰り道にこの森を通りかかりました。やはり二人ともこの森は恐いらしく、酔いもさめ、ビクビクしながら歩いておりました。

すると、前方に何か白いものが動いたように見えたのです。ゆうれいでは…。

二人が恐る恐る近づくと、それは若い女の人でした。「私はおこんと申します。すみま

せんが、潮来の私の家まで送っていただけませんか。」という。二人は心よくひきうけ、いまきた道をひき返しました。ところがなかなか森をぬけられない。(おかしいなあ。さつきと道が違うみたいだ。)と少々不安になつていると、

やつと一軒の家がみえてきました。(あれ、こんなところに家があつたかな。)二人はそうは思ったが、おこんの家へあがりこみ、お酒などをこちそうになりました。酒好きの二人は、すぐに飲めや歌えの大騒ぎ。「お風呂もわきましたよ。」というので風呂につきりながら酒盛りをして上機嫌でした。ところが、突然ザブリと頭から水をかけられ、驚いてまわりを見るとおてんとう様は頭の上にあり、村の人たちが笑いこらげていました。二人は泥の田んぼの中に、どっぷりつかってさわいでいたのです。

